

**入選** 大阪府 松尾 知弥 様 (高校生 男性)

中学生のとき、社会の先生がもうすぐ定年になる年で、僕たちに「みんなが働いてるころ、先生は年金暮らしやから、しっかり働いて先生に年金ちょうだいな。」と冗談交じりに言っていました。そのとき僕は年金の制度について初めて知りました。その時までは、将来の自分のために若い時から貯金しておく、という制度だと思っていたので、若い世代が現在の高齢者を支えている制度とは知りませんでした。それと同時に、日本国民は助け合って生きていて、年金という制度はその助け合いを次の世代へ受け継いでいく、約束していくシステムなのだなと思いました。「人を助けてわが身助かる」という言葉がぴったりだなと思いました。

そして、高校生になって年金は高齢者のためだけにあるものではないということを知りました。病気やけがで障害が残ったときに受け取れる「障害年金」、一家の働き手が亡くなったときに受け取れる「遺族年金」という、お金を稼ぐことが困難になった人達のためにも活躍する制度だということを知りました。僕が将来大人になったら障害者になるかもしれないし、亡くなってしまうかもしれない。誰もが抱える避けられない不安を安心にさせてくれることはとても心強いなと感じました。しかし、それは誰もが受け取れるものではないということも知りました。きちんと保険料を納めているからこそ、自分がピンチになった時に助けてもらえるんだなと思いました。だから、二十歳になったらきちんと納めたいと思います。

まだ僕は年金を払う年齢ではないので、関係のないことだと思っていたけど、「障害年金」や「遺族年金」を父や母が受け取ったとき、それで生活することになるので、全く関係がないわけではないということも知りました。

現在、少子高齢化が進み、若者一人が支えている高齢者の数が増えてきているということをよく耳にします。だからといって、若者が保険料を払わないのはおかしいと思います。今の高齢者の方々が汗をかいてつくってこられた社会の上に僕たちは生きているからです。そしてなにより、今の高齢者の方々が一つ上の世代を年金で支えてきたからです。そうやって世代から世代へ脈々と受け継がれてきた助

け合いの心を僕たちは次の世代へ繋げる義務があります。僕にとってはまだまだ先のことだけど、「年金」という制度の大きさや偉大さ、重みが僕の中で大きく膨らみました。